

アイヌタイムズ

第15号

アイヌタイムズ第15号(2000年9月20日発行)からアイヌ語抜粋

著者: 横山裕之

ウス-ヌプリ (有珠山) オプシ ルウェネ

(アイヌ イタク [アイヌ語])

2000 パ 3 チュプ ケセ タ、テ パク ノ ア
プ-タ マチヤ (虻田町) オッタ シリ モ ア コ
ロカ、シネ アン ヒ ワノ シリシモイエ カシ
パヒ ア・オヤモク テ ルウェネ。

ケット アン コロ シリシモイエ クシ、ネ マ
チヤ オロ ウン ウタラ キラ パ ルウェネ。
オカケ タ、2000 パ 3 チュプ 31 ト タ ウシ
-ヌプリ (有珠山) オプシ ルウェネ。

ウシ-ヌプリ (有珠山) アナク テ パクノ ア
ラワン スイ オプシ セコロ ア・イエ ルウェ
ネ。

1663 パ タ、オプシ ヒネ チセ ウフイ ワ
アシクネン イサム。

1769 パ タ、ヌプリ オプシ ワ アペヘ ラプ
クス、ポロンノ チセ ウフイ ルウェネ。

1822 パ タ、オプシ アペヘ ラン ワ アプ
タ コタン ア・アルシテッカ ワ ワニウ エレホ
ツネン イサム。

オロワノ オプシ クス 1853 パ タ 大有珠
アン ワ 1910 パ タ 明治新山 アン ワ
1944 パ タ 昭和山 アン ルウェネ。

1822 パ タ、アプ-タ コタン ウン ウタラ ア
ナク、ホシキノ ヌプリオプシ ヒ タ アナク
ネ キラパ コロカ、ワント パクノ シラニ
タ「タネ ピリカ ナンコロ」セコロ ヤイヌコ
ロ ホシツパ ルウェネ。

コロカ カンナスイ ヌプリオプシ クス、イン
ネ ウタラ イサム ルウェネ。

アラスイ ヌプリオプシ コロ、オロワノ シリ
モ ペコロ ア・ヌカラ ヤッカ ソンノ カ イヤ

有珠山が噴火しました

(日本語)

2000年3月末、虻田町は今まで大地は静か
であったけれども、どういうわけだかある時か
ら地震が起こりすぎるので不思議に思いまし
た。

何日も地震が起きたので、町の住人が逃げま
した。

そのあと、2000年3月31日に有珠山が噴火
しました。

有珠山は、今まで、7回の噴火があったと言わ
れています。

1663年には、噴火して、家が焼失して5人亡
くなりました。

1769年には、火砕流があつて、家が焼失しま
した。

1822年には、火砕流があつて、虻田集落が
全滅し、50名亡くなりました。

その後、噴火で1853年には大有珠ができ、1
910年には明治新山ができ、1944年には昭
和新山ができました。

1822年には、虻田の住民は、最初に火山の
噴火があつたときは避難しましたが、10日ほ
ど経ったときに「もういいだろう」と考えて戻り
ました。

しかし再び火山が噴火したので、多くの方が亡
くなりました。

一度火山が噴火すると、その後静かなように
見えても、本当に危ないのです。

イキプテ ルウェ ネ。

雲仙普賢岳 カネノ アン ペ ネ。

1822 パ タ、ウシ-ヌプリ (有珠山) オルシ
ペ アナク ユカラ オッタ カ ア・イエ ハウエ
ネ。

シラウオイ (白老) ウン アイヌ民族博物館
アナク 研究報告書 第4号 (イイエ-イネブ
(4)) カ タ ネ ユカラ ヌイエ ルウェ ネ。

ネ ユカラ オッタ、アンノシキ ワノ オプシ
ヌプリ、オプシ アペヘ ランワ アプ-タ コタ
ン ア・ウシカ。

アプ-タ コタン オロワ キラ ワ アラ パ ヲ ア
ナク、アトウイ オルン テレケ プ ウフイ ス
マ ネヤ ピヨタ ネヤ ラン クス サパ ウフイ
ヒネ、ラウオテレケ ヤッカ アトウイ ワッカ
ルキ アイネ ホン ピセセ、セコラン ペ ア
ヌイエ ルウェ ネ。

タンパ タ アナク ネ ウタリ オピッタ ヤイトウ
パレ クス、ネン カ ソモ ライ ルウェ ネ。

ト-ヤ マチヤ (洞爺湖温泉町) チュッポク タ
アン ヌプリ ウトロサム ワ オプシ。

3200 メートル パクノ スプヤ アッ ペ ネ ル
ウェ ネ。

16000 パクノ オカ ウタラ キラ パ ルウェ
ネ。

ト-ヤ マチヤ オッタ セセク トイ ワッカ アン
ワ、ヌプリ オウシケ タ アン チセ ア・ペレ
パ カ キ、テレケ スマ トモ オシマ カ キ
ルウェ ネ。

オカケ タ ペネ トイ ネヤ ピヨタ ネヤ ポロ
ンノ オカ コロカ、タネ ウタリ シツチャシヌ
レ コロ オカ。

トウナシノ ネ ウタリ オピッタ ホシツパ ワ
アプンノ オカ ヤク ピリカ セコロ ク・ヤイ
ヌ。

雲仙普賢岳でも同じでした。

1822年に噴火した有珠山の話はユーカラの
中にも言われています。

白老のアイヌ民族博物館の研究報告書第4号
に、そのユーカラが書かれています。

そのユーカラには、真夜中から噴火した山の
噴火した火が虻田の集落を消し、

虻田の集落から、逃げた者は、海に飛び込ん
でも頭が焼け、飛びこんでも、海水を飲んで、
腹を一層ふくらましたと書かれています。

今年は(地元の)みんなが注意したので誰も死
にませんでした。

洞爺の町(洞爺湖温泉町)の西の山麓から噴
火がありました。

噴煙の高さは3200mでした。

一万六千人の人が避難しました。

洞爺の町(洞爺湖温泉町)では、大きな熱泥流
があって、それで山のふもとにある家が壊され
たり、飛んだ石が(家に)ぶつかったりしました。

その後、ぐちゃぐちゃの土(泥流)やら火山灰や
らがたくさんありましたが、今は人々が街を片
付けているところです。

早く全員が帰宅できて安心して暮らすことが
できればよいと思います。

アイヌタイムズをご購入していただける方がお知り合いでいらっしゃいましたら、お声をかけてい
ただけると大変うれしく思います。

購読連絡先: 〒055-0101 北海道平取町二風谷 80-25 萱野志朗(宛)

購読料:1500 円 (4 号ごと/アイヌ語版のみ)

2300 円(4 号ごと/アイヌ語版と日本語版)

読者からの投稿募集:

(連絡先): 〒047-0033

浜田隆史(宛)

北海道小樽市 otarunay@yahoo.co.jp

電子メール:

ウェブページ: <https://otarunay.at-ninja.jp/taimuzu.html>

注)アイヌタイムズの著作権は、アイヌ語ペンクラブにあります。

注)1. 赤字は、アイヌ語です。

2. 赤字のイタリック文字は、主に日本語由来のアイヌ語外来語です。